

要約

佐藤宏香

パンダが中国の国民的な象徴であるという考えは、歴史の中で生まれてきたものに過ぎず、パンダが中国の動物かどうかには白黒つけるのは難しい。むしろ現実的な視点からは、国際政治の中でそれほど重要であるとは見なされないにも関わらず、パンダがこのような国際的な議論に結び付けられるのはどういうことであるのかを考える。そのために、中華民国の行政文書を参照し、その時期の対外宣伝活動を調査することで、パンダが中国の象徴になっていった歴史的背景を明らかにする。

中国国民党中央宣伝部国際宣伝処は 1941 年に初めて宣伝外交の一部として、アメリカにパンダを贈った。この時初めてパンダは二国間の友好の象徴となった。文書によりパンダ外交を用いて、政府がアメリカと友好関係を築き、同時に中国の文明化された姿を示そうと試みていたことを明らかになった。しかし中国政府はそれ以前、パンダに対してほとんど興味を示していなかった。中国のパンダ外交は 4 つの歴史的文脈に従って始まったものである。一つ目は抗日戦争の際、国民党にとって西南地域の支配の重要性の増加したこと。二つ目は、自国の自然資源は自国によって守られなければならないとする主張のように、中国の独立国としての主権意識の高まり。三つ目は、中国を文明化された国と示す、動物愛護の考えの採用。四つ目は、戦時外交下での、アメリカからの幅広い支援を得ることの必要性である。つまり、パンダが中国の象徴となった過程は、パンダに対する振る舞いが中国の「外部正統性」を構成する要素となりうるような国際社会に組み込まれていく過程に過ぎない。これは現代の東アジアを取り巻く状況にもつながっている。